

## 自己評価報告書

平成 23 年 4 月 30 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320131

研究課題名（和文）

「マイクロサッカドとしての在来知」に関する人類学的研究

研究課題名（英文）

Anthropological Study on Local Knowledge as “saccade”

研究代表者

杉山 祐子 (SUGIYAMA YUKO)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：30196779

研究分野：文化人類学・民俗学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：在来知、動的把握、身体、環境、変化、関係性、養蜂

## 1. 研究計画の概要

在来知は、抽象化されリスト化された「知識」として教えられるのではなく、人が対象との関係から直接つかみ取る知である。それは身体と環境に埋め込まれたままで人から人へと伝えられる。このとき在来知は人々の日常的な実践-運動する身体を通して形を与えられるのであり、人と環境の間で揺らぎながら成立する。本研究では在来知を環境との関係性の結び結び方の問題と捉え、関係を動的に保つことによって対象を捉えるやりかたとして読み解くことを通して、在来知の多様なありようと明らかにし、「動き」から在来知を描く理論的方法論的基盤を見いだすことを目的とする。

研究に参加するメンバーはそれぞれが極北、オセアニア、アフリカ、日本と別々のフィールドでの調査研究を蓄積してきたが、本研究ではそれら個別フィールドでの調査に加えて、日本の秋田県に基盤フィールドを設定し、共同調査を行うことを通して、「動き」を通じた在来知への接近法を検討する。

## 2. 研究の進捗状況

これまで通算7回の研究会を開催し、研究メンバーによる発表と討論のほか、先行研究のレビューや関連分野の研究者を招いての講演などを通して、知見と考察を深めてきた。これまでに講演願ったのは、国立歴史民俗博物館准教授（当時）で環境論、生業論を展開する安室知氏、身体性に焦点を当てた音楽教育の研究と実践を進める今田匡彦弘前大学教育学部教授、近世剣術の継承者でもある日本民俗学者の小山隆秀氏（青森県立郷土館研究主査）、オセアニア地域を主なフィールドとする春日直樹一橋大学教授、マダガスカル

漁民の事例を手がかりとしながらブリコラージュ実践共同体論を展開してきた飯田卓国立民族学博物館准教授等を講師として招き、「動き」を捉える実践的・理論的可能性について、また在来知とイノベーション、「動き」から見る在来知の特徴的なありよう等について討論検討を進めた。その結果、分節化と連結、動くことによる対象との関係の安定化、対象に寄り添う関係調整等の特徴が抽出できた。

秋田県鹿角市を中心とする基盤フィールドでの共同調査が広がりを見せ、転飼養蜂業者だけでなく、定置養蜂業者を含めた多様な養蜂のやり方が明らかになった。また、数十年にわたる植生の変化や交通通信網の発達等の変化への敏感な対応も不可欠であったことがわかった。

基盤フィールドでの共同調査の他に、それぞれのフィールドでの個別調査も着実に進展した。また、それらの成果を年2回の研究会で丹念に検討し、「動き」に着目したことによって、在来知が身体的な技術だけでなく、環境や対象の認知、生業を成功させるための社会的な調整などに及ぶ広がりを含むことが明らかになった。

各学会での成果発表や論文、著書などの出版も活発に行われている。

## 3. 現在までの達成度

## ①当初の計画以上に進展している

（理由）上記の通り、「動き」に着目したことによって、基盤フィールドにおける共同調査が予想以上に成功しており、メンバー間の活発な議論が展開してきた。その成果が個別フィールドにおける調査検討にも生かされており、それぞれが新たな視点を開拓してい

る。また、メンバー以外の研究者を招いての研究会も盛会で、関連領域の研究者とのネットワークが形成されつつある。各学会での成果発表や論文、著書などの出版も活発に行われている。

#### 4. 今後の研究の推進方策

来年度の総括に向けて、補足的調査も含めたフィールドワークを行うとともに、これまでの成果を文化人類学会等で発表するなど公表につとめ、議論をさらに深化させる。また、人類学、民俗学だけでなく関連する諸分野の研究者との交流を進め、分析の視座を広げながら、検討を重ねる。これらの成果を踏まえて、報告書作成のための準備に入る。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Soga, Toru “Sharing System of the “Scarce Resources” in Southern Ethiopia “ *Proceedings of the 16th International Conference of Ethiopian Studies*, (ed. by Svein Ege, Harald Aspen, Birhanu Teferra and Shiferaw Bekele), 2009年 査読有
- ② 大村敬一 「岸上伸啓著『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』『文化人類学』74(4)、2010年、査読有
- ③ 大村敬一 「自然＝文化相対主義に向けて：イヌイットの先住民運動からみるグローバリゼーションの未来」『文化人類学』75(1)、2010年 査読有
- ④ Morie Kaneko Variations in pottery making in southwestern Ethiopia. *Proceedings of the 16th International Conference of Ethiopian Studies*. (ed. by Svein Ege, Harald Aspen, Birhanu Teferra and Shiferaw Bekele) 383-394、2009年 査読有
- ⑤ 大村敬一 「<立ち現われ>と<言い現われ>の仕組み：心的表象なき記憶とことばのメカニズムについての覚え書き」『トーテムの物語：北西海岸インディアンのくらしと美』北海道立北方民族博物館 2008年 48-51 査読無

[学会発表] (計5件)

- ① 杉山祐子 「ミオンボ林帯や木幡農耕民のイノベーションに関する考察」日本アフリカ学会第47回学術大会、2010年5月29日 奈良市文化会館
- ② Morie KANEKO Pottery Making as Community-based technology: Japanese perspectives in Africa. Technology and culture. International workshop on *Éléments d'anthropologie fondamentale*

Objets, techniques et cultures 2010年5月27日 EHESS, Marseille

- ③ 杉山祐子 「だれもが『母親』-アフリカ焼畑農耕民ベンバの「母親」のすがた」日本霊長類学会第25回大会(招待講演)名古屋学院大学 2009年7月7日
- ④ 大村敬一 「<知識>に抗する<仕事>：グローバリゼーションを超える想像力」日本文化人類学会第43回研究大会分科会「人類学的方法はグローバリゼーションを穿ちうるか？」2009年5月31日 大阪国際交流センター1F 大ホール
- ⑤ 竹川大介 貨幣の起源と他者認知の進化-『記憶』と『歴史』をつなぐもの 日本文化人類学会第43回研究大会 大阪大学 2009年5月30日、大阪国際交流センター

[図書] (計6件)

- ① フランツ・ボアズ (大村敬一 翻訳) 訳 『プリミティブ アート』言叢社 2011年 総ページ数 653 ページ
- ② 金子守恵 『土器づくりの民族誌』昭和堂 2011年、総ページ数 282 ページ
- ③ 掛谷誠・伊谷樹一編 (第5章 杉山祐子) 『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会 2011年 pp. 215-245
- ④ 杉山祐子・山口恵子編 『ものづくりに生きる人々-旧城下町・弘前の職人』弘前大学出版会 2011年 総ページ数 115 ページ
- ⑤ 松井健、名和克郎、野林厚志 (共編) 第10章 曾我亨 『グローバリゼーションと<生きる世界>』昭和堂 2011年 pp. 389-426
- ⑥ 河合香吏 (編) (第5章 大村敬一, pp. 101-122、第9章 曾我亨 pp. 203-222、第10章 杉山祐子 pp. 223-244) 『集団-人類社会の進化』京都大学学術出版会 2009年

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

特になし